

もっと知りたい 語り部の皆さんのエピソード

【当時 猪方在住 大学生 男性】

昭和49年9月1日から3日、多摩川の左岸の一部が決壊した事を知っていますか？ そう、その流された堤防の上を、最後に歩いたのは私です。私はその時、大学4年生でした。後期授業が開始された日でした。そんな時台風16号の襲来で、関東地方は激しい雨に見舞われ、多摩川上流域も集中豪雨で水位が上昇中ということで、多摩川を見に行ったのです。その時の多摩川は、対岸の登戸まで堤防のギリギリ目一杯の水位で泥水が流れていました。しかし、私は傘もささず歩いていたので、雨は上がり、台風は通り過ぎ、



余波で風が時々吹く程度の曇り空でした。少し上流にある小田急線の鉄橋が水面すれすれに近づいていました。また、その先の多摩川水道橋の橋脚も殆ど泥水の中に消えていました。「すごい水量だな」と思いました。

そして、私を通った後、堤防は立入禁止になりました。文字通り水面下で、多摩川は私の歩いた堤防を削り取る作業をしていたのです。日頃見る堰の横の小堤防と言われる所が弱く、堰で止められた水は、小堤防を壊し本堤防に向かって削り出していました。この現象は水位を上げた泥水の中で行われていました。これは、家が流されるニュースで知ったことです。

濁流の迂回路は、民家のある下地の地面を削り19棟を飲み込んでいきました。迂回する泥水の流れを変えるため、堰を壊しに自衛隊が来て爆弾を仕掛けた話、映像もニュースで知りました。この爆風で我が家のガラスも1枚割れました。爆破現場から500メートル以上離れていたのですが被害届をしました。

ですので、川の水面が安全水位であっても、堤防の崩壊はあるので、気象状況や地元自治体が発信する警報に従い、安全のための行動をしましょう。

【当時 駒井町在住 大学生 男性】

和泉自動車教習所から500メートル程のところの多摩川の近くに自宅がありました。9月1日、夜の11時に駅に着いた時に駅が騒然としていました。「土手の方には行ってはいけない。」「猪駒通りは通ってはいけない。」などの規制がありました。「あなたの家は、流されているかもしれない。また、避難所

へ行ってください。」と言われました。驚き、避難所に行きました。ところが、隣の家の家族はいたのですが、自分の家族はいなかったため、家に帰りました。

家を真っ暗にして家族3人も寝ていました。消防や警察が何度も訪問し避難するように言いに来たようでしたが、避難はしなかったとのことでした。何故なら、多摩川のことと詳しい父親が「もう水が引いているから、逃げなくても大丈夫だ」と判断したからと言っていました。もう避難したと思ってもらうために、家を真っ暗にしていたと聞きました。

9月2日、3日と晴天でしたが、家が流されていました。濁流にのみこまれる家もありましたが、そのままの姿で流されていた家もありました。ピアノが流されていたのも見ました。そのままの姿で家が流された人は、何かを探しに来ていました。アルバムのようでした。



決壊から一週間後くらいに堰の爆破の時に、爆破地点から500mも離れていたにもかかわらず、ものすごい音が聞こえました。爆風でツイシのガラスが割れました。自分としては、水が引いている状況で爆破する必要があったのかと思いました。

決壊の後、半年くらいで家が建ち始めました。

子供の頃、堰の近くで遊んでいました。小堤防で欠けている所があり、中が空洞だったことを覚えています。中に入ることもできたのです。「この堤防は弱いな」と思いました。決壊の時に、あれが壊れたからだと思い、あれが原因だったのではないかと思います。



【当時 猪方在住 30代 男性】

自宅は平屋で隣の家は2階建てでした。隣の家の人が「布団とか2階にあげればいいよ。持っておいで」と声をかけてくれたのですが、多摩川が決壊したとしても、せいぜい30cmくらいだろうと高を括りお世話になりませんでした。

9月1日から3日は快晴でしたが、次々に家が流されていきました。川上が相当の集中豪雨だったと思います。

自衛隊が堰を爆破して、土手の方に流れている水を流そうとしましたが、上手くいきませんでした。

地域の人たちは避難するように言われました。警察や消防の人から「かなりの被害が想定されるので避難するように」と言われました。妻が3人目の出産のため世田谷の病院に入院していました。幼稚園に通っていた娘2人がいましたので、実家から母親が来て手伝ってくれていました。母親と娘たち2人と一緒に二中に避難しました。二中でおにぎりの炊き出しがありました。東京都の日赤から1000個の配布がありました。たが足りていませんでした。その他に、議員さんらが夫々の自宅でおにぎりを握って提供してくれました。今では考えられないことです。昔は地主さんの議員が多かったかと思います。

自衛隊の爆破の効果は殆どありませんでした。一週間後に、千葉県の石工の人に来てもらい爆破をすることになりました。雨戸を閉めて避難するように言われ、雨戸をしめて避難しました。その爆破では、猪駒通りの商店のガラスはかなり割れてしまいました。

はじめは、越水する危険があるという情報が流れ、対象地域の人は避難所に避難したのですが、越水の危険がなくなり、堤防の爆破の時だけ避難するようになりました。

私は、土木の仕事をしていました。当時は、川崎側の川岸に野球場4面分位の広さのNECのグラウンドあり、そこに何トンもする機械を置いていたのですが、跡形もなく流されてしまいました。どんなに重いものでも、地面の下を水でえぐられたらどうにもならず、簡単に流されてしまうのです。

避難するときには、近所同士で助け合いました。声掛けあいました。近所の人たちは、私の家が「田舎からお祖母ちゃんが来ているし、小さい子が二人いるし、奥さんは出産で入院している」ということを知っており、気にしてくれて声をかけてくれました。だいたい隣近所の様子は皆な知っていました。近所



の助け合いがあったから、人的被害が0だったとも言えると思います。

人災だろうと裁判が20年近く続きました。住民が勝ったのですが大変な裁判でした。しかし、裁判中は補償が出てこない。とりあえず国が整地までしてくれましたが、家は自分で建てないとならなかったのです。マイホームのローンがあり、その上にまた借金をして家を建てなくてはならない人の思いを新聞の記事で読みました。

水害について子ども達に言えることは、「とにかく北に逃げる」ということです。南の方は、高い建物は学校しかない。北の方は、高層マンションや市役所がありますが、南の方は、六小、二中、三小に逃げるしかないのです。そこで2階以上ぐらいで待機するしかありません。

これだけ狛江が平らということは、多摩川の水でならされて平らになっていると考えられます。何百年、何千年かわかりませんが、再びそういう事態が起こると考えられます。宿川原、等々力、布田などの地名が多摩川を挟んで両側にあります。いかに多摩川があれていたのかがこれによっても分かります。

【当時 西野川在住 30代 男性】

その日は何故か、会社からいつもより早めの夜7時過ぎに帰宅しました。

家の玄関を開けると、普段は家内と1歳の娘だけなのに、母と祖母までが出迎えてくれました。それだけでも不思議でしたが、皆の様子がいつもと違っていました。

「大変なことが起こったの！ 直ぐに避難所へ二人（弟夫婦）を迎えに行つてー！」

「何があったの？」

「多摩川が増水して、水が溢れそつで付近の住民に避難命令が出たのよー！」

「Y子（弟の嫁）さんから、『これから避難所へ向かう』と電話があったの！あの人たちは新婚で地理的にもまだ良く分からないし、知り合いもいないし、不安だらけで可哀そつ。だから助けに行つてー！」

夕食を食べたかどうかも記憶にありませんが、避難所の六小方面の地図を片手に、慌てて車に乗り込んだことは覚えています。世田谷通りの向こう側の地理にはさっぱり不案内だったのですが、何とかなるだろうと安易な気持ちで車を走らせました。狛江三叉路から世田谷通りに出て多摩川方面に向かったのですが、左



折りたい道路は通行止めばかりで「目的地へは行けないのでは？」と不安になりました。しかし、懐中電灯で誘導をしている方に、

「避難所にいる弟夫婦を迎えに行くところですが、どこを行ったら良いのでしょうか？」

と尋ねると、通行禁止の柵を外してくれ、

「この先を歩き、右折し・・・」

と親切に教えてくれました。その先も何度か迷いかけましたが、その都度、係の方々に助けられ、無事に避難所前に着くことができました。

避難所の入り口を開けると沢山の人が右往左往していました。ここでも係の人が大声で

「有馬さん！お兄さんが迎えに来ましたよ！」

と叫んでくれたお陰で、直ぐに、心細い不安顔にやっと笑顔を浮かべた弟の嫁さんに出会うことができました。

弟とは連絡が取れなかったとのこと。兎に角、車で弟の住むアパートに向かったところ、運良くアパートから避難所に歩いてくる弟とも出会うことが出来、野川の我が家へ帰った次第です。我が家では、家族全員が喜び一杯で迎えてくれました。

携帯電話はもちろん、車のナビもない時代でしたので、殆ど何事もなく弟夫婦を連れて帰ることができたのは奇跡に近い事といまだに思っています。狛江市の消防団員や市役所の方々、そして、大勢の市民の皆さんに助けられたと感謝しています。

語り部のビデオでは、「避難先は二中」と話していましたが、車でかなり複雑な道だったことを思い出し、「六小に避難したのでは」と思うようになりました。とにかく、皆さんありがとうございました。

以前から多摩川で釣りを楽しんでいましたが、家内が嫌がるほどのヘドロの臭いに変形した魚が多かったのです。あの大水以来、ヘドロが殆ど流され清流に近づき、五本松の近くは、釣り人で溢れる時代も訪れたほどでした。

家や家財を流された方々も多かっただけに、大災害の再来がない事を祈ります。

【当時 東野川在住 20代 男性】

当時、私は、東野川（当時は「寛東」と呼ばれていました）に住んでおり、それは、妻と結婚する前の年の事です。妻が千葉の実家でテレビを見ていた時、台風の大変な状況が画面に映され心配になり、私に電話で連絡を取ろうとしたのですが中々つながらなかったとのことでした。

当時は、アマチュア無線という電波を使って世界中の人と話をする趣味が流行っていました。電話がつながらなかったので、情報の入手手段としては、アマチュア無線が多くの人に使われていました。私もアマチュア無線で情報を受信し発信もしていました。因みに、アマチュア無線は現在もしています。



【当時 市外在住 20代 男性 入庁一年目の市役所職員】

昭和49年4月1日に入庁し、5か月後の災害でした。台風16号。8月31日に前線が停滞し、多摩川の上流付近に大雨が降り、小河内ダムが放流することになりました。私は、市民部環境衛生課に配属されていました。市民の健康施策や健康調査、予防接種などを行うところです。

9月1日、防災訓練の予定でしたが、私は訓練の対象の課ではなかったので、休みでした。総務課や災害対応職員は出勤していました。多摩川災害に備え、市内在住職員も出勤し対応することになりました。

9月2日、私にも参集指示が出ました。避難所立ち上げについて、指示系統は決まっては無く、その場で決まっていきました。手の空いている職員が避難所に行き避難所運営をすることになりました。



多摩川沿岸が浸食され、流出した家がありました。避難の確認作業をしました。主となる避難所は二中。越水の可能性もあったので、六小、一中、一小も避難所を開設しました。福祉会館はその時は未だ避難所ではありませんでしたので、流出した家の家族は二中の体育館へ避難しました。その他の人は校舎へ避難しました。避難所は、その後、豊の部屋のある福祉会館に移動しました。避難所では、避難者の受付、物資（食品やタオルなど）の受付、情報の収集をしました。狛江市には、当時、無

線はありませんでしたので、市役所のジープで被災現場へ行き情報収集をして、体育館で報告をしていましたが、情報不足でした。アマチュア無線、臨時電話、伝令しかなかったのです。避難者は、自宅の様子が心配なのですが、情報が中々届かずにいら立ちがありました。

9月1日、二中の避難者数は体育館と校舎合わせて1400人。越水がないことが分かったので、近所の人は帰宅し、9月2日の避難者数は150人となりました。

堤防の爆破により二次被害がありました。451軒です。保証金2300万円。この水害は、二ヶ領宿河原堰を作るときに、すべきことをしていなかったことが原因でした。

一番大事だと思う事は、市民の知りたい情報を早く届けることだと思います。それが混乱を防ぎ安心につながると思っています。

【当時 和泉在住 30代 男性 消防団員】

気になり、風間は、多摩川を何度か見に行っていました。お風過ぎに「あそこが危ない」と召集がかかり、水防活動が始まりました。一軒目が流される前に、その家の庭にいたことを覚えています。木流しをするということで、大木を切って流したり、土嚢を作って入れたりしたのですが、水の力は凄かったです。消防の訓練で、木流しや土嚢訓練をしていたのですが、いざとなったら効果はありませんでした。

堤防から水が溢れていたわけではなくて、土手が削られていくわけですから、土嚢などまるで落ち葉と同じ状態でした。一軒目のその家が流されるまでは一時間くらいあったと思います。もう駄目だと思

い自分たちも避難しました。

テトラポットをトラックで2・3台、海から持ってきたようですが、それを入れても全く効果がなく、あっという間に100mくらい下流に流されていきました。テトラポットがゴロゴロ流されてしまうのです。川底の砂がえぐられるのでどうにもならないと感じました。



家が流されるのは簡単なものだと思います。電線が張ってあるうと何が張ってあるうとあっといいう間に流されていきましました。普通の水害ではないと感じました。幅広く水が増えてくる浸水被害だったらこんなに家が流されることはなかったと思います。

3日間くらいほぼ徹夜で作業をしました。3日目には、和泉自動車学校の縁石を枕にして少しだけ寝ました。夜中に一旦帰宅して、また出ていくといった状況でした。

火事は消せるが、水は手が付けられないと感じました。何もできないのです。市民には、ただ「避難しろ」だったので、貴重品を持ち出す余裕があったのかは分かりません。

連絡などは、トランシーバーがあったのですが、長距離は飛ばなかったと思います。サイレンで市民に危険を知らせたり、一軒一軒回って避難の声かけをしました。

消防署ができてから、まだ5年程でした。消防団、消防署と言っても素人集団みたいなものでした。皆、無我夢中でした。

水の力は凄い。かなり前に、下水道工事などにより井戸に水が溜まらなくなったことがありました。しかし、15年前くらいに覗いたら、水が溜まっていたのです。長年の間に、水の道ができて溜まってきたのですね。コンクリートできちっと工事しても水が出てきている所があります。水の力は大きかったですね。福島の原発の地下水も止められないのと同じです。



狛江の土地で一番高い所は、こだま幼稚園近くの交番の場所でしょう。あの坂が「和泉の大坂」と呼ばれています。昔、あそこが消防団の置き場になっていました。土地が高いので、そこに火の見やぐらを作ったと聞きました。

これからは、やはり、隣近所と仲良くなるのが一番大事だと思います。いざとなったら、助け合うしかないです。しかし、個人情報の壁があり、高齢者や障がい者がどこに住んでいるのか分からないです。災害のときは、何とか助けあげたいと思っています。近所で仲良くやっていけば、一人暮らしのおじいちゃんのことも分かります。個人情報で教えてもらえないからこそ近所づきあいが必要になると思っています。



【当時 猪方在住 30代 男性 商店街の会長】

8月30日頃、奥多摩の方に大雨が降りました。ダムが壊れたらいけないということ、放流しました。元々水量は多かったのですが、放流したことで更に水かさが増えました。

9月1日の防災の日、商店街の会長をしていたので、旅行の打ち合わせに登戸の観光会社に車で行くかと思っていたのですが、多摩川の水量が増えて危ないと思い自宅に引き返しました。車を自宅に止めた後、多摩川を見に行きました。その時には、まだ土手に水が上がってきてはいなかったのですが、水量はものすごく多かったです。

現在の多摩川決壊の碑の近くに、当時は、鉄棒やブランコが設置されている公園がありました。見ているうちに、川は更に水かさが増えて来たのですが、雨も降っていないのでそのうちに水は引けるだろうと思っていました。午後1時か2時ごろだったと思います。3時頃、とうとう鉄棒やブランコが水に浸ってきて、それから土手が崩れ始めた。二ヶ領宿河原堰が高過ぎて水が越えられず、水がこちらに来てしまいました。

一家4人で猪方3丁目に住んでいました。暗くなってから、避難するように言われました。

自宅には、水も何も来ませんでした。自宅の前の道路（猪駒通り）は昔土手だったらしいのです。土手の向こうへ作った部分が崩れました。洗濯屋さんの向こうの家が流れていました。今の土手のすぐ下の道のところは流れてしまいました。

自宅に居ては、夜は危ないからということ、避難しました。六小だったか二中だったか忘れてしまいました。我が家は、家族4人で避難しました。子供は、小学生でした。避難所には、1日か2日しか行きませんでした。避難所と自宅を行ったり来たりしました。避難所は、夜に寝るだけで、昼は自宅に居ました。避難所の様子は、ごろ寝状態でした。あんなところに寝られるものではないです。ただ、横になっていただけでした。頭の上を他人が歩くと、誰かが訪ねて来たりと兎に角混雑していました。避難所は、横になっているだけの場所でした。

避難所の運営などは、主として担当しているところは無かったように思えます。市役所の職員がしてくれていたのかもしれないです。毛布なども無かったのですが、9月だったので、ごろ寝で平気でした。

1軒目が流れたのが、確か、2日の日でした。近所の家が次々と流されました。家が流されている時は、雨は全然降っていなかったです。日が当たっていたくらいです。



すが、どこの子なのか全然わからない。今の若い人は、もう少し隣近所の人と顔を合わせて、覚えてもらうなどして欲しいですね。避難をするときに、顔を知っていれば声をかけることができます。「この辺りの避難所は二中だよ」って教えてあげることができません。避難所を知らない人達はいざとなったときにウロウロするのではないかと思います。防災訓練にも、若い人たちに出て来て欲しいですね。「向こう3軒両隣」、そういうのは無くなりませんでした。余計なお世話という人もいますが、近所の人を知っていれば助かる命もあります。

【当時 猪方在住 30代 男性】

当時、私は35歳で、家族4人で暮らしていました。

9月1日、多摩川の土手を見に行きました。川岸の公園の子どもの遊具が傾き始め、暗くなってから水が増えました。

一軒流されましたが、自宅の方には水は来ませんでした。多摩川の水面は、かなり下の方に見え、渦巻いていた。物凄い音の濁流でした。

自宅は、改築2年目でした。実家は猪方にあり、徒歩10分くらいのところにありました。兄が消防団の団長をしていましたので、大勢の消防団の方々が、家財道具や畳など全てを実家に運んでくれました。土足で家の中を歩き回っていました。

堤防の爆破の際、ガラスが割れたり、サッシが曲がったりしました。

自宅の裏の家は流されなかったのですが、その家は傾いてしまいました。その隣の家は流されました。次は自分の家かと気が気でなかったです。

私は、昼夜が分からなくなっていました。子ども達は実家に3〜4日間、避難させてもらいました。

小河内ダムでの18杯分の雨が降ったと聞きました。ダムの放流は仕方なかったと思います。

